

教育的意義に関する家庭科の製作実習研究の到達点

山中大子 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
河村美穂 埼玉大学教育学部生活創造講座
川端博子 埼玉大学教育学部生活創造講座

キーワード: 家庭科、製作実習、教育的意義、先行研究レビュー

1. 研究の背景と目的

明治14年(1881年)から第二次世界大戦終戦(1945年)まで、日本の学校教育において女子の主要教科であった裁縫科は、和裁実習の教育的意義を、実用と「婦徳」の涵養という一元的なイデオロギーに収斂させた。それは結果的に、皇国民の育成とジェンダーバイアスの強化に加担してしまった側面がある(山中, 2022)。家庭科は、平和な民主主義社会と愛情に富んだ豊かな生活の構築のために、「各人が家庭の有能な一員となり、自分の能力にしたがって、家庭に、社会に貢献できる」ことを目指して設置された(昭和22年発行学習指導要領家庭編(試案), 1947)。現行まで9期の家庭科の学習指導要領においては、7つの多面的な製作実習の教育的意義(A:生活実践、B:社会の発展、C:職業の準備、D:理解の定着、E:創造力を育む、F:心情を育む、G:喜びを味わう)が示されてきた(山中, 2023a)。

家庭科の製作実習研究においては、製作実習(被服製作・布を用いた製作)の教育的意義の解明・提示を主な目的とした報告が複数なされている。そこでは、上記の7つ以外の意義も含めて、多様な製作実習の教育的意義が示されている。しかし個別に提示される教育的意義が様々な方向に広がるほど、家庭科の製作実習の特徴と学校教育における位置づけが曖昧になってしまうという問題もある。家庭科教育の固有性に基づいた製作実習の教育的意義についての議論が求められる。そこで本研究では、これまでの製作実習研究の教育的意義に関する成果を整理し、家庭科の製作実習の教育的意義を検討する視点を明確化することを目的とする。さらに製作実習研究の蓄積を基に、教育的意義に至る家庭科の製作実習の学習過程を検討することで、製作実習の特徴を明確化することを試み、製作実習実践の充実に貢献していきたい。

2. 研究の方法

2-1 研究対象

1947年の教科設立から現在まで、家庭科の製作実習には70余年の教育実践の積み重ねがある。1950～2019年の間に、家庭科の製作実習に関する研究論文は405報が日本で公表されている(山中, 2023b)。そのうち、製作実習の教育的意義(効果・機能・目的等)の解明や提示を主な研究目的とした研究は、29報確認された。表1に示す29報の製作実習研究を本研究の分析対象とする。

2-2 分析方法

製作実習研究29報それぞれの研究方法と、解明・提示されている家庭科の製作実習の教育的意義を本文中から抜き出し、表1にまとめた。

表1 家庭科の製作実習の教育的意義の解明や提示を主な研究目的とした研究一覧

公表年	研究者. 論文名. 掲載誌.	研究方法	家庭科の製作実習の教育的意義
a 1963	小川ソノ. 中学校の「被服製作」指導における二三の問題. 大阪学芸大学紀要C教育科学, 5, 119-124.	質問紙調査 (大学生)	家庭生活向上/うるおい・あたたかさ/ 消費生活運営/楽しい
b 1965	藤沢きみえ. 中学校における被服製作指導に関する一考察. 奈良女子大学研究紀要, 7, 41-56.	質問紙調査 (中・高生)	興味意欲/思考力・創造力/生活に役立 てる喜び/よき人間性
c 1981	林千穂. 男女共学家庭科における被服領域について:被 服製作の扱いを中心として. 長野県短期大学紀要, 36, 53-59.	文献調査・ 質問紙調査 (教師)	主体的な衣生活ができる能力を身につ ける
d 1981	中間美砂子, 別府芳子, 山崎万里江. 衣生活意識と被服教 育のかかわりあいに関する研究(2). 日本家庭科教育学会 誌, 24(2), 29-35.	質問紙調査 (中・高生)	興味→意欲→家庭実践
e 1988	山下智恵子. 被服製作学習の教育的価値. 日本家庭科教 育学会誌, 31(2), 61-64.	授業調査 (ブランク分析)	計画・問題解決の能力/人間としての教 育/生活文化の経験
f 1988	堀内かおる, 武井洋子, 田部井恵美子. 被服製作及び手芸 の教育的意義:学習意欲からの考察. 東京学芸大学紀要 48, 27-140.	文献調査(要 領) 質問紙調 査(大学生)	手指の巧緻性の発達/美的感覚や創造 性を養う/個性の表現/生活に潤いを与 える手段
g 1989	鈴木洋子. これからの中学校家庭科における被服製作学 習・調理実習について:家庭科担当教師の意識. 日本家庭 科教育学会誌, 32(3), 9-15.	質問紙調査 (教師)	製作の喜び/衣服の構成を理解/生活 を楽しむ手段/衣服修理に役だつ/衣服材 料を理解/製作過程を思考する能力
h 1989	吉井明子. 家庭科衣生活領域における被服製作の取り扱 いの現状と展望:家庭生活を総合的に捉える視点から. 広島大学教育学部紀要第二部, 38, 199-208.	文献調査	家庭経営上有効な人間形成/総合的衣 生活把握の媒介
h' 1993	鈴木明子, 古田幸子. 家庭科衣生活領域における被服製 作の取り扱いの現状と展望(2):高等学校普通科の実態の 考察. 広島大学教育学部紀要第二部, 42, 167-172.	質問紙調査 (教師)	自分自身を表現/生活を創造/専門被服 教育への動機づけ/国民的教養/興味関 心/形式陶冶
i 1994	武井洋子. 学校教育における被服の製作技能指導に関す る教員の意識(2). 日本家庭科教育学会誌, 37(2), 9-15	質問紙調査 (教師)	消費者の被服選択能力/裁縫基礎技能 習得/裁縫の知識理解/充足感等の体験 /創造性/生活活用能力/手指の巧緻性
j 1994	青木香保里. 家庭科「被服」領域における被服製作実習の 教育的価値:家庭科のカリキュラムを考えるために. 市 立名寄短期大学紀要, 26, 45-64.	文献調査 (指導要領) 授業実践	人類の歴史の疑似的追体験/生産・流通 構造がわかる/実感と認識の統一
k 1995	高木直, 沢田裕子, 鶴田敦子. これからの被服製作の方向 性(1):被服製作をめぐる山形県の最近の動向. 家庭科教 育, 69(3), 47-52.	質問紙調査 (教師)	作る楽しさや完成の喜び/被服を作 った経験/じっくり取り組む/既製服購入 の観点
l 1997	福村愛美. 家庭科における被服構成学実習の役割につい て. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 35, 195-205.	質問紙調査 (高・大学生)	意欲喚起/充実感
m 1997	鈴木明子. 高等学校家庭科における創作活動の教育的意 義に関する一考察. 長崎大学教育学部教科教育学研究報 告, 29, 75-88.	文献調査(理 論) 聞き取り 調査(教師)	個性・創造性・表現力育成/人間形成(形 式陶冶)/技術習得(実質陶冶)/創る喜 び
n 1997	中部被服研究会. 創造性を育む被服教育の方向を探る: 中学校家庭科教育の現状. 家庭科教育, 71(10), 45-51.	質問紙調査 (教師)	創造性/巧緻性/製作技術の基礎基本の 習得/生活での応用力
o 2001	高木直. 被服製作の今日的意義. 家庭科教育, 75(3), 12- 16.	質問紙調査 (高・大学生) 授業実践	被服製作の教育的価値≠子どもの学習 意義/楽しい授業
p 2004	猿田佳那子. 「製作実習」の持つ意義:生活デザインの視 点から. 家庭科教育, 78(12), 16-20.	文献調査 (理論)	生活を工夫し創造する能力/製造の体 感的理解
q 2004	小林京子. 被服製作実習の教育的意義. 中等教育研究紀 要広島大学附属福山中高等学校, 44, 163-168.	授業実践 (中・高生)	成就感・達成感・自信/既製品の選び方 /物や資源を大切に作る姿勢/製作の楽 しさを味わう
r 2005	木村智美, 吉田紘子. 茨城県の小・中・高等学校における 「被服製作」教育の意識と実態. 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 54, 165-185	質問紙調査 (教師)	技能・技術を身につける/創る楽しみを 味わう
s 2006	多々納道子, 竹吉昭人. 家庭科教員の指導実態からみた 製作活動の教育的意義. 島根大学教育学部紀要教育科 学, 39, 19-24.	質問紙調査 (教師)	生活技能の習得/ものづくりの達成感・ 満足感/生涯学習へつなげる/自己表現 /消費者理解
t 2008	川端博子. 被服製作学習が育むもの. 日本衣服学会誌, 52 (1), 7-10.	質問紙・テスト (小・大学生)	手指の巧緻性向上/自己効力感の育成/ 創造性を引き出す
u 2009	鈴木明子. 家庭科教育における「布を用いた製作」の教育 的意義の検討:体験としての意義と基礎的・基本的技能 習得との関係を中心に. 広島大学大学院教育学研究科紀 要第二部, 58, 301-307.	文献調査 (指導要領)	知の総合化体験の場/技能習得の場/直 接体験(成就感・自尊感情の形成・生活 実践の基盤)
v 2012	小川裕子, 後藤あゆみ. 中学校家庭科「布を用いた物の製 作」の授業:家庭科と美術科における実態と教師の意識 の比較を通して. 静岡大学教育学部研究報, 43, 179-190.	質問紙調査 (教師)	技術・技能の習得/達成感・自尊感情を 育てる/文化芸術の伝承/自己表現/材 料の性質の理解

w	2012	大塚真理子. 家庭科教育における製作学習の教育的意義の考察: 消費者教育の視点を加えて. 関西教育学会年報, 36, 76-80.	質問紙調査 (大学生・成人)	生活を総合的に捉える消費者の視点/ものを大切にする
x	2015	鈴木明子. 家庭科における布を用いた製作の教育的意義の再考: 製作学習への意識とフィンランドのクラフト教育からみた課題. 日本家政学会誌, 66(1), 588-593.	質問紙調査 (小・中生) 授業調査	生活知と学校知の総合化/家庭科の学習内容を統合/成就感→自尊感情/自己効力感の向上→創造力/技能習得
x'	2015	鈴木明子. 家庭科の布を用いた製作学習で育む資質・能力. 初等教育資料, 932, 74-77.	質問紙調査 (小学生)	同上
y	2016	西田順子. 家庭科教育法における製作活動の教育的意義. 樟蔭教職研究, 1, 79-86.	質問紙調査・授業実践 (大学生)	満足感・達成感・自信/手作りの良さ楽しさ/資源の有効活用
z	2016	鈴木恵子. 高校実践なぜ縫うのか(1): 改めて考える被服製作の意義と題材. 家教連家庭科研究, 332, 46-51.	授業実践・授業感想の分析 (高校生)	衣服は人の手で作られることを実感する/物を創り出せる手に育てる/衣服の価値に気づく
z'	2016	鈴木恵子. 高校実践なぜ縫うのか(2): 改めて考える被服製作の意義と題材. 家教連家庭科研究, 333, 44-49.	同上	同上

3. 研究の結果と考察

3-1 製作実習研究における教育的意義の変遷

29報の製作実習研究において解明・提示された製作実習の教育的意義(表1右端)のうち代表的なものを取り上げ、家庭科の製作実習の教育的意義の変遷を、図1の通り整理した。



図1 製作実習研究に示された家庭科の製作実習の教育的意義の変遷

(1) 1980年頃までの家庭科の製作実習の教育的意義

家庭科設立当初から被服製作技能が家庭生活に直接役立っていた1950年代までは、教育的意義に関する製作実習研究はほとんど見られない。しかし1960年代半ば頃から、実際の生徒の製作技能と授業配当時間では「学習指導要領にもられた通りには、とうてい出来難い」状況になり (b)、教師から言われた通りに追い立てられるように製作する授業形態や、小・中・高等学校で行われる製作実習の一貫性への問題提起が、研究aとbによってなされた。中学校の家庭科が技術・家庭科となったことを受けて、工学的な分野が拡大することにより製作実習が「ただきれいに縫う、完成する、ということだけにとらわれてしまう」能率的な作業になってしまうことへの批判も見られる (a)。

1970年に衣料品サイズのJIS規格が定められ、既製服の全国的流通が本格化するようになり、家庭における被服製作が次第になされなくなっていく。製作実習で身につく知識・技能が家庭生活に直結しなくなったこの頃から、製作実習の教育的意義が提起されるようになる。研究cは、既製服が発達すればするほど、「主体的な」衣生活ができる能力を身につけるために、製作を学校教育として行わなければならないと

主張する。研究 d は、「被服製作教育においては興味を育てることが最も重要で、興味の程度が高いものは学習意欲、家庭実習頻度が高くなる」ことを示している。1980 年頃までの研究は、製作実習の衣生活上の有用性を示すことで、教育的意義としていた。

(2) 1990 年頃の家庭科の製作実習の教育的意義

1990 年頃から、家庭科の製作実習の教育的意義に関する研究の報告数が増える。研究を推進させた背景は 3 つあると考える。第一に、安価な既製の流通による製作技能の有用性の低下、第二に、家庭科の男女共修や授業時間削減によって教育実践の再編をせまられたこと、第三に、家庭科教育が児童・生徒の人間形成の一翼を担うという教科教育としての自覚である。男子も女子も家庭科の製作実習を学ぶ意義があらためて問われた。e～n は、以上の問題意識からなされた研究である。e は、それまで被服や衣生活の学びとして捉えられていた製作実習を「人間としての教育に意味がある」として、「計画」や「問題解決」の汎用的な能力の育成を製作実習の教育的意義として提示している。f は製作技能を「豊かな生活を創るための技術」としてとらえ、その価値を経済性よりも「自分だけの作品をつくらることができる」など個性や美および潤いといった側面から提示している。h と h' は、製作実習には生活全般への興味関心や理解を深め「自分自身を表現するものを作る」という基本的欲求を満たす意義があり、その副産物として「生活全般に必要なあらゆる能力に転移できる形式陶冶」として、個性、計画性、想像力、忍耐力、協調性などの人格形成、喜びと達成感等の教育的意義をあげている。m は、被服製作を創作活動としてとらえ直しており、その教育的意義は、「知識や技能の習得がもたらす実用性よりも、人間形成にあるとする」としている。1990 年頃の研究において解明・提示された製作実習の教育的意義は、それまでの被服・衣生活の学びの枠を超え、家庭科全般や生活全般に対応する学び、そしてそれらを通じた能力の形成や人間形成が検討されている。

また学びの結果だけでなく、製作を体験することそのものによる、楽しさや喜びと充実感にも教育的意義があることも示された。j では「人類の歴史の疑似的追体験」「できるという実感」、k では「ものを作る楽しさや完成の喜び」「被服を作った経験」「じっくり取り組む」といった製作実習体験の価値が示された。l は、製作における「充実感」という作り手にとっての意義に着目し、充実感と作品の活用及び役立つと感じることとの関連を示している。

(3) 2000 年以降の家庭科の製作実習の教育的意義

2000 年以降は、学校教育において縮小・削減されていく製作実習の現状に対して、製作実習の存在意義や学習効果の明確化が模索され、それぞれの観点から具体的に実証したり提言したりすることで製作実習の教育的意義を拡張する研究が増えている。例えば、製作実習の実生活上の意義として、次のものが提示されている。q は「物や資源を大切に作る姿勢」「既製品の選び方」を、s は「生涯学習へつなげること」を、v は「文化芸術の伝承」を、w は「生活を社会や環境などと総合的に捉える」消費者としての視点を、y は「資源の有効活用」によるエコライフを、製作実習の教育的意義のひとつとして示している。

さらに製作実習の教育的意義は、製作や衣生活に限定されない児童・生徒の成長と発達への貢献にまで拡張された。例えば、q と y は充実感・達成感から得られる「自信」を、t は「自己効力感」を、u と v は「自尊感情」を、x はこれらが「創造力」を育むことを、製作実習の教育的意義のひとつとして示している。ただし o は、「被服製作の教育的価値イコール子どもの学習意義とはならない」ことを指摘しながら、楽しく意義のある授業づくりを提案している。

3-2 製作実習研究 (a～z) における家庭科の製作実習の教育的意義の構造

製作実習研究の成果を基に家庭科の製作実習の教育的意義の構造を検討するため、a～z の研究で示された教育的意義 (表 1 右端) を、/ / の区切りごとに一単位とし、合計 94 の教育的意義を整理・分析する。

(1) 家庭科の製作実習の教育的意義の分類

はじめに、9期の学習指導要領に示されてきた家庭科の製作実習の教育的意義の7カテゴリー（A:生活実践、B:社会の発展、C:職業の準備、D:理解の定着、E:創造力を育む、F:心情を育む、G:喜びを味わう）（山中, 2023a）に、製作実習研究 a~z で示された94の教育的意義を分類することを試みた。A~Gで示された語と同一ではなくても、ほぼ同意味のものと同じカテゴリーに収めた。

次に、A~Gに分類できなかった教育的意義を分類した。研究 a~z においては、「製作の体験」そのもの、また「技能の習得」それ自体も、教育的意義として示されていた。また創造力以外のさまざまな「能力を育む」ことや「人間形成」という教育的意義も示されていた。

最終的に、a~zの製作実習研究で示された94の家庭科の製作実習の教育的意義は、A~Gと「製作の体験」「手技能習得」「能力を育む」「人間形成」の、合計11カテゴリーに分けられた。それらは更に大きなまとまりとして、①生活実践、②能力形成、③喜びの体験としてとらえることができ、この3つが家庭科の製作実習の教育的意義を検討する視点であると考えられる（図2）。多くの研究が、教育的意義のうち複数のものを提示している。例えば研究 n は、製作実習を通して「創造性を磨き」「製作技術の基礎基本の習得」と「巧緻性を養う」ことで「豊かな衣生活」が営まれることを提示している。家庭科の製作実習における能力形成は、生活実践を見据えた能力形成である。そのため、能力形成という個人の成長と、生活実践という他者との関わりが両立しているところに家庭科の教育的意義の構造のひとつの特徴がある。

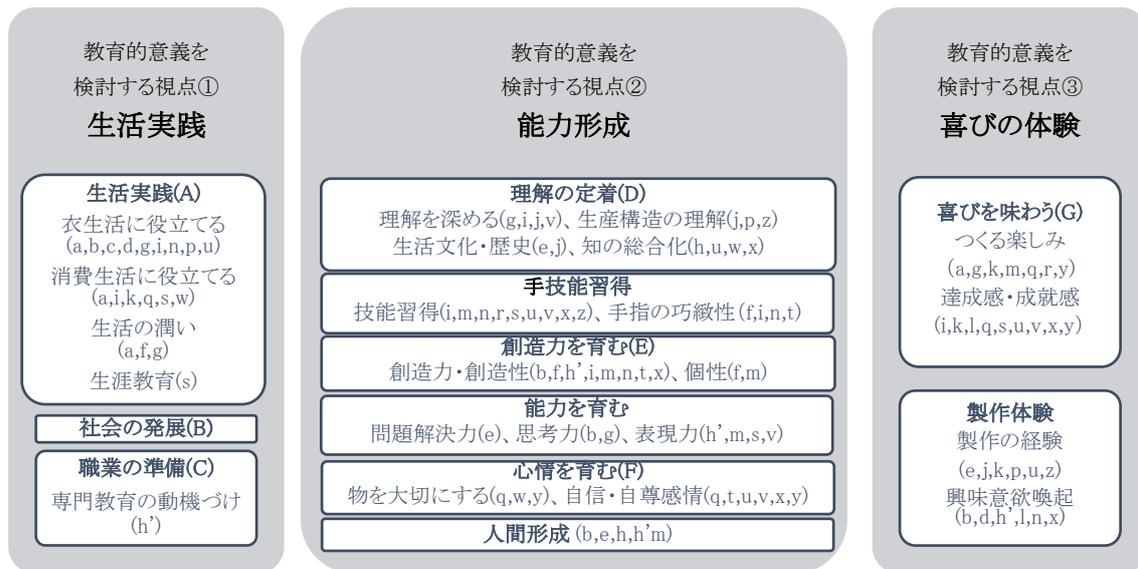


図2 製作実習研究 (a~z) に示された家庭科の製作実習の教育的意義の分類

(2) 家庭科の製作実習の教育的意義を検討する視点①生活実践

製作実習の教育的意義を検討する視点①生活実践は、生活実践(A)、社会の発展(B)、職業の準備(C)、の3つのカテゴリーの教育的意義からなるまとまりである。生活実践(A)のカテゴリーに含まれる教育的意義は、「衣服修理」(g)「リフォーム・装飾など」(i)の家庭における直接的な製作実践と、製作実習によって「被服の見方なり取り扱いが一步步向上」し(a)被服選択能力の育成がなされるという、間接的に消費生活実践につながる意義が示されていた。一方で、学習指導要領で示された社会の発展(B)に該当する教育的意義は、a~zの製作実習研究では示されていない。職業の準備(C)についてもh'にわずかに見られるのみであった。

(3) 家庭科の製作実習の教育的意義を検討する視点②能力形成

②能力形成は、理解の定着(D)、創造力を育む(E)、心情を育む(F)、手技能習得、能力を育む、人間形成、の6つのカテゴリーの教育的意義からなるまとまりである。形成が期待される能力は、製作に関連した能力から、汎用的な能力、更には人間形成までもが教育的意義として示されていた。

(4) 家庭科の製作実習の教育的意義を検討する視点③喜びの体験

③喜びの体験は、喜びを味わう(G)、製作の体験、の2カテゴリーを含む、製作の体験そのものに価値を見出している教育的意義のまとまりである。喜びを味わう(G)は、研究a(1963)からy(2016)まで、時代を越えて示されている。近年では特に、児童・生徒が家庭で製作を行う機会がほとんどなくなってしまったため、学校において製作体験をする機会それ自体にも教育的意義が見出されている。

3-3 家庭科の製作実習の教育的意義に関する製作実習研究の調査方法と課題

29報の製作実習の教育的意義の検討には、質問紙等を用いた調査(21報)、文献調査(8報)、授業実践(6報)、という3つの調査方法が用いられていた。複数の調査方法を組み合わせている研究もあった。以下に調査方法ごとに研究の特徴を整理し、研究の成果と限界やその理由、残された課題を示す。

(1) 質問紙等を用いた調査(研究a, b, c, d, f, g, h', i, k, l, m, n, o, r, s, t, v, w, x, x', y)

最も多い調査方法である。教師(指導者)を調査対象としたものと、児童・生徒(学習者)を調査対象としたものがある。教師に対する調査の多くは、10個程度の教育的意義を質問項目として提示し、それが製作実習にあてはまるかどうかについて回答を求めるものが多い。この調査方法の限界は、研究者が想定した教育的意義が検証の範囲となっていることである。研究iにおいては、研究者の設定した項目の他に「その他」として自由記述回答欄を設けたところ、研究者が選択肢に想定していなかった教育的意義が様々な記述された。加えて、教育的意義が羅列された質問項目においては、回答者がすべての教育的意義を肯定しがちであることも指摘できる。また、児童・生徒を対象とした質問紙調査では、児童・生徒が製作実習を通して感じた自分自身の変化が、製作実習の教育的意義を指すものなのかという疑問も残る。

これまでの質問紙調査は、授業を特定しない製作実習についての抽象的な調査となっていた。そのため、具体的な教授方法の提案という、授業実践につながる示唆が得られないという課題がある。

(2) 文献調査(研究c, e, f, h, j, m, p, u)

文献調査としては、主に学習指導要領や教科書の分析が行われた。検討される製作実習が抽象の域を出ることなく、製作実習という教育活動の中でダイナミックに児童・生徒が変化・成長するという視点が不足している。製作実習実践の実際から家庭科教育ならではの教育的意義の構築が求められる。

(3) 授業調査(研究j, o, q, y, z, z')

実際の授業を通して教育的意義を検討した研究は、研究数が少ない。製作実習の教育的意義を実証する研究の積み重ねが必要である。

(4) 家庭科の製作実習の教育的意義と研究方法

家庭科の製作実習の教育的意義が、これまでどのような調査方法によって示されてきたのかを検討するために、11の教育的意義と、3つの調査方法をクロス集計した。例えば、研究aは「質問紙調査」によって「生活実践(A)」と「喜びを味わう(G)」を教育的意義として示しており、それぞれの交点に集計した。29報の製作実習研究の集計結果を表2に示す。多くの教育的意義の調査方法が質問紙等を用いた調査に偏っている。今後は、教育的意義を実証する授業実践研究や実験研究の充実が求められる。

(5) 残された課題

これまでの教育的意義に関する製作実習研究29報の課題の1つ目として、研究間のつながりが見られず、

研究間で議論がなされていないことがあげられる。掲載誌を見ても学会誌論文は6報と少なく、残りは大学紀要や団体誌における報告である。個々の研究が主張する教育的意義が精査されることなく、また全体として研究が積みあがっていない。

課題の2つ目は、研究と教育実践の往還が見られないことである。研究が解明・提示した教育的意義が教育現場で検証されておらず、理論の精査がなされていない。これからの製作実習研究では、教育実践の実際を基に教育的意義の理論を構築し、その理論が教育実践によって発展させられることが求められる。

表2 製作実習研究29報(a~z)の調査方法と家庭科の製作実習の教育的意義のクロス集計結果

教育的意義		調査方法		
		質問紙調査	文献調査	授業調査
生活実践	生活実践(A)	11	4	1
	社会の発展(B)	0	0	0
	職業の準備(C)	1	0	0
能力形成	理解の定着(D)	6	4	5
	手技能習得	9	3	4
	創造力を育む(E)	8	3	2
	能力を育む	5	1	2
	心情を育む(F)	6	1	2
	人間形成	2	2	2
喜び	喜びを味わう(G)	12	2	6
	製作体験	8	3	2

ひとつの研究で複数の教育的意義・調査方法を示しているものは、すべて数え上げた。

3-4 家庭科の製作実習の学習過程の検討

家庭科の製作実習では、授業後の一人ひとりの生活実践や一人ひとりの能力形成を教育的意義として見据えていることが、研究a~zによって示されてきた。そこでは、授業における製作物は学びの媒体であり、製作物の完成は学びのゴールではなく通過点とされる。図2に示された3つの視点(①生活実践、②能力形成、③喜びの体験)に基づくと、教育的意義に至る家庭科の製作実習の学習過程は次の通り考察される。家庭科の製作実習は、製作技能など教師から児童・生徒に「教えられる学び」から、①生活実践や汎用的な②能力形成といった児童・生徒一人ひとりが個々に「つかみとる学び」に発展していくことが期されており、その発展の推進力のひとつが③喜びの体験ではないだろうか。家庭科の製作実習では、授業において一斉に同じようなものを製作しても、喜びや楽しさという個人的な体験によって製作が個人に引き付けられ、一人ひとりの生活実践や能力形成に結びつく可能性があると考ええる。

学習権宣言(第4回ユネスコ国際成人教育会議宣言,1985)では、学習を「The act of learning, lying as it does at heart of all education activity; changes human beings from objects at the mercy of events to subjects who create their own history.」と示している(UNESCO,1985)。家庭科の製作実習も、生活における有用性や経済性からだけでなく、一人ひとりの主体化と人間形成を促す視点から、研究b,e,f,h,h'などにおいてその教育的意義が示されてきた。主体的な生活能力を身につけるために製作実習を学校教育として行うという、製作実習研究で提示されてきた家庭科の製作実習の教育的意義は、既製服が主流の現代においてもなお有効であると考ええる。

家庭科の製作実習では正しい技能を用いて手順通りに製作することや製作物のできばえが重視され、キット教材などを用いてクラス全員が一斉に同じようなものを製作することも多い。この

ような一見不自由な製作体験を経るが、それは一人ひとりの製作後の生活実践を可能とする技能と巧緻性の獲得を重視するためであると考えられる。また児童・生徒の生活は一人ひとり異なり、多様である。そのため家庭科の製作実習でたとえ同じようなものを製作したとしても「つかみとる学び」は個別で多様であり、成長段階や学習状況によっても変化し得る可能性がある。一方で、戦前の裁縫科の和裁実習は「教えられる学び」にとどまり、実用や「婦徳」という学習効果が一律に求められていたことが、戦後に始まる家庭科の製作実習とは大きく異なっている。家庭科の製作実習を通して個々が「つかみとる学び」の多様性は、これまでの製作実習研究 a～z において数多くの製作実習の教育的意義が並列して示されてきた理由のひとつだと考えられる。

4. まとめと今後の課題

1950年から2019年の間に日本で公表された家庭科の製作実習に関する研究405報のうち、29報が家庭科の製作実習の教育的意義の解明・提示を主な目的とした研究であった。29報の製作実習研究において、94の家庭科の製作実習の教育的意義が示された。94の教育的意義は、生活実践、社会の発展、職業の準備、理解の定着、創造力を育む、心情を育む、喜びを味わう、製作の体験、手技能の習得、能力を育む、人間形成の合計11カテゴリーにわけられた。それらは更に大きなまとまりとして、①生活実践、②能力形成、③喜びの体験、としてとらえることができ、この3つが家庭科の製作実習の教育的意義を検討する視点だと考察された。家庭科の製作実習においては、一斉に同じようなものを製作する授業が③喜びの体験をすることで個に還元され、一人ひとりの①生活実践や汎用的な②能力形成に発展するのではないかと考えられる。

29報の研究の間につながりは見られず、様々な家庭科の製作実習の教育的意義が並列して示されており、これまでの製作実習研究において教育的意義に関する討論や合意形成は見られなかった。これからの家庭科の製作実習研究においては、研究全体で製作実習の教育的意義について議論し、家庭科教育実践の実際に基づいた製作実習固有の教育的意義を明確化していくことが求められる。製作実習研究の成果によって教育実践課題に対応し、新たな教育実践によって更に製作実習研究が進展させられるという、教育実践と製作実習研究の往還による家庭科教育の充実と発展が、今後の製作実習研究に期待される。

付記

本研究の一部は、「家庭科の製作実習を通して何を学ぶのか：学習指導要領と先行研究における製作実習の教育的意義の変遷」として、日本家庭科教育学会第65回大会で発表した。

引用文献

- UNESCO. (1985). Declaration on the Recognition of the Right to Learn (Paris, France).
<https://www.unesco.org/en/education> (最終アクセス：2023年3月21日)
- 山中大子. (2022). 被服製作実習の教育理論(欠如)の歴史的背景. 学校教育学研究論集, 46, 69-79.
- 山中大子. (2023a). 学習指導要領の目標が示す家庭科の製作実習の教育的意義. 投稿中.
- 山中大子. (2023b). 1950年～2019年の家庭科の製作実習研究の動向. 投稿中.

学習指導要領引用元 URL

国立教育政策研究所教育情報データベース：<https://erid.nier.go.jp/guideline.html>
(最終アクセス：2023年3月21日)

(2023年3月31日提出)

(2023年5月7日受理)

Attainment of Previous Studies on Educational Significance of Sewing Practices in Home Economics

YAMANAKA, Hiroko

Doctoral Course the United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

KAWAMURA, Miho

Faculty of Education, Saitama University

KAWABATA, Hiroko

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Educational significance was reviewed from 29 research articles on sewing practice in home economics reported from 1950 to 2019. In 29 previous studies, 94 educational significances were demonstrated in 11 categories: lifestyle, social development, work readiness, fostering understanding, fostering creativity, fostering emotions, enjoying pleasure, production experience, acquiring skills, fostering general abilities, and human development. These 11 categories can be further grouped into (1) Practice, (2) Ability Development, and (3) Experiencing Enjoying, and these three categories can serve as perspectives from which to examine the educational significance of home economics sewing practices.

Next, based on the results of previous studies, we examined the learning process as a characteristic of sewing practice. It was envisioned that the learning taught in the simultaneous classes of sewing practices would be returned to the individual through (3) Experiencing Enjoying and develop into learning in which each student grasps (1) Practice in daily life and (2) Ability Development. There was no discussion or consensus on the educational significance among the 29 research articles. In considering the future of sewing practices, it is necessary to discuss the educational significance of sewing practices to clarify the uniqueness of sewing practices training in home economics classes.

Keywords : home economics, sewing practices in classes, educational significance, reviews